

ふるさとと歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと「風」

第三十二号（二〇〇九年一月）

風に吹かれて（〇九の一）

白井啓治

『月明かりが漆黒の闇を割って新しき年の来る』

「トンネルを抜けたら真っ暗がりの闇夜だった」昔、元気に若かったころ、徹夜で車を走らせ溪流釣りに出かけたものであったが、山中のトンネルを抜けたら、本当の闇であったという経験は何度もした。トンネル内は如何に真っ暗であっても、ヘッドライトの明かりが届かないという事はないところが、峠をショートカットするトンネルは、抜けた先が谷底になっていて、明りを受けてくれる木々がなかったりする。ダッシュボードの明りだけで、フロントガラスの先は本当の闇である。もし、ガードレールがなかったら、谷底にまっさかさまである。

私達は、光というと思ってしまうのであるが、光が明るいというのは、そこに光を遮ろうとする物体が存在した時にのみ明るいという概念が存在するのである。光の通る空間にも、塵も埃も全くなかったとすると、そこに光が照っている、走っていることすら認識することが出来ないものである。

聖書にあるように、「光りを」と叫んでも、そこに光を受け反射する物がない限り、光が闇を照ら

したとしても、明るくはならないし、光が照っているという事はわからないのである。

昨年引き続き、浮世は百年に一度の大不況と言われている。しかし、よくよく冷静に考えてみると、今言われている不況という意味がよく分からなくなってくる。

今大騒ぎしている不況とは、お金の価値が下がり、物が動かなくなる（売買されなくなる）ことを指して言っているようである。しかし、これはお金そのものに価値があると錯覚を起こしていることから生じている不況の概念で、お金には価値はないと考えれば今の不況はなくなってしまいうのである。

そうは言ってもわが国には自給率が高はなはだしく低下しているのだから実質的飢餓不況は慢性的に存在している。金銭的な不況なんかは右往左往している場合ではないのだ。

以前に、私は山野草を見て、食べられるか否かの知識には自慢できるものはないが、この山野草はこうして食べれば旨く食べられる、の知恵は些か持っている、と書いた事がある。この知恵は金銭的にはあまり価値の無いものである。しかし、生き延びるための価値としては大いにあると思っ

ている。
生き延びる為に価値を算出してくれるものを

「文化」という風に定義することが出来る。この場合の価値というのは、お金で尺度される程度のもではない。生きる、暮らすというのは単なる道具であるお金で尺度できるものではない。太陽という光によってもたらされる恵みを持った地球という星に生きる私たちなのだから、光を反射して、辺りを明るく照らし出す本当に価値ある物を持つ暮らしを創りたいものである。

私にとっての「ふるさと」は

ふたば自給農園 松山有里

今年新しく出会ったことば座の方々によって、私の百姓暮らしは豊かさを増した気がする。一年間を振り返っても、それは大きなことのひとつだ。

なぜか八郷に来ることになったのも、この風景や土地が醸し出している空気に連れてこられたようなものだが、なぜ吸い寄せられるようになってしまったのかは、八郷ほど唱歌の「ふるさと」が似合う場所はないということと無関係ではないだろうと思う。私のなかで必要としていた部分を、この土地がもとも持っている需要と供給がピッタと合ってしまったようだ。

百姓暮らしを始めてから、初めて梅干しを漬けたり、みそをつくったりするようになった。二年目にして、その季節がやってくると体がうずうずする感覚を覚え、やらずにはいられない体になってしまったのだが、きつとこのような行為にも「ふるさと」はひそんでいられるだろう。それによって心安らぎ、落ち着いて永続的な暮らしを展望でき

るような暮らし方。自分のなかにある脈々とうけつがれてきたDNAに沁み込んでいる核となるもの。初めてすることなのに、新しく学んだことなのに、なぜか懐かしい。きつと「ふるさと」という心の拠り所は、真夏のぎらぎらと照りつける陽の下で梅干の香りをかいだときのような心地良さの中に確実にあるのだろう。

ことば座の存在にしてもその感がある。ことば座によって浮かび上がってきた物語によって更にこの土地への愛情がわく。時代はさかのぼったとしても物語に登場するのは、わたしと同じように、喜んだり、悲しんだり、怒ったり、恨んだり、嫉妬したり、傷ついたりする人間たちだ。私が毎日立っているこの畑にも、ここで生きてきたたくさんの人々の感情が地層のように積み重なっているのだろうと思うと、自分も含めて人という生き物をとっても愛おしく感じる。

先日行われた公演、新鈴ヶ池物語の中で、恨みながら一匹一匹魚を捕らえては片目を潰している鈴姫の姿に思わず涙してしまった。物語を観ることの作用は、その物語に出てくる大きな感情によって自分の中の同じような感情が共鳴して浄化されることなのかもしれない。物語は感情の「ふるさと」なのだ。

いずれにしても皆さんとのご縁を大切にしたい。特に自給を掲げる私の農園は、同じ空気を吸っている近くの人々と共に生きることを目指したい。「自給」をキーワードに「ふるさと」と共に、お金のあるなしに関係なく、いかに心豊かに生きていけるかを模索しながら、皆さんと歩んでいきたいと思う日々だ。

古里の暮らしを想いながら

小林幸枝

二〇〇八年の締めくくりとして、石岡に伝わる伝説「鈴が池の片目の魚」をベースにした「新鈴が池物語」を、居合道で日本一に選ばれた池田さんをお招きし、野口さんのオカリナ、矢野さんのパーカッションをバックに演じたのですが、自分でもビックリする感覚体験をしたのでした。新鈴姫物語に書かれている鈴姫が、小林幸枝の心の中に入り込んできて、小林幸枝でなくなってしまうような感覚にさせられたのでした。

前半の「伝承」の舞、そして鈴姫の怨念物語の始まるまでの手話朗読では、いつもの感じで演じられていたのですが、鈴姫になっての演舞に入ってから、私が私でなくなり、鈴姫が私の肉体を借りて入り込んでしまったかのようになっていました。最後に、池田さんの介錯の演武が終わるまで、舞台に立って演舞を行っているという感覚も記憶もなくなっていたのでした。

池田さんの介錯の演武が終わわり、とても気持ちがあすつきりとした気分になった時、白井さんが「終わり」と言って舞台の階段を降りてこられた時に「あれ、舞い劇が終わったのだ」と意識したのでした。

そして観客の皆さんから大きな拍手を頂いていることに気づき、私は今鈴姫の朗読舞劇を演じたんだ、とハッキリと現実に戻ったのでした。

演技とは、その役になりきることでだと言われていました。役に入り込んで、役になりきってしまうと、自分がこうしたら綺麗に見えるだろうとか上手に見えるだろうといったことを考える隙間が全くないのだという事を初めて体験したのでした。

そして、白井さんが、舞台で演じるという事は、舞台上に実際の生活をするということだよ、と言われていた頭の痛く、混乱するような話の意味が少し理解できたのでした。

先月号にも少し書きましたが、今回の鈴姫物語は「未来への警鐘として鳴らされたふるさと物語の火を消してはならん！ 鈴姫の怨念を池田忠男の剣が割り、生まれ出た希望を小林幸枝が舞う」と言われていましたので、鈴姫を通して明日の夢を表現したいと思っていました。夢を表現するためには、鈴姫の本当の恨みを私も感じ、そして女の本当の幸せとは何かを私も明確に分からないなりに探してみました。

何かの結論が出たわけではなかったのですが、鈴姫の舞い演技に入ってから、評価（誉められたい）を考える私がいなくなっていました。そうしたら白井さんの朗読、野口さんのオカリナ、池田さんの演武、矢野さんの太鼓が一つの風になって私を押しつけてくれ、兼平さんの常世の国の五百相に見守られる中で、鈴姫と私の心を一にしにくれたように思います。気がついたら皆さんの拍手の中でした。

「ふるさとに伝承されてきた物語というのは、そこに必ず未来への暮らしを導くための道標が打ち込まれて在るものです。だから、伝承のふるさと物語は大切に、常に新しい風を通して伝えていかなければ、その国（ふるさと）は滅びます」と白井さんはいつも言っています。今回ほどそのことを全員で表現できた舞台はなかっただろうと思います。

バレーボールの仲間たちが大勢観に来てくれて、何時もの小林さんじゃない、凄い、見なおした、

補聴器専門店 いしおか補聴器

補聴器は、大きく聞こえれば良いというものではありません。音がクリアに聞こえるためには、音量を上げるだけではいけないのです。

医師の正しい診断と、補聴器専門店としてのスキルが大切です。合わないメガネで目を悪化させることと同じことが補聴器にも言えます。お気軽にご相談ください。

当店は、「ふるさと風の会」「ことば座」を応援し、会報や風の文庫、ことば座公演チケットなどを取り扱っております。

また、風の会のことば絵作家、兼平ちえこさんの絵が常時展示してありますので、お気軽に、お立ち寄りください。

(石岡市勤労青少年ホームの並び、直ぐそば。駐車可)

石岡市石岡2158 6

電話0299-24-3881

と言われました。また、鈴姫の恨みは本当に恐ろしく感じ、愛情表現では涙が出たと言われました。

いろいろ違うジャンルの人が一緒になつて一つの風をつくるのは、そんなに簡単にできる事ではないと思います。ことば座は、とてもいい人達との廻りあわせを頂き、いい風をつくることができていると思います。

二〇〇九年は、ことば座も三年目を迎え、勝負の年と思っています。応援、お願いいたします。

私をとりまく春夏秋冬

伊東弓子

仲秋の名月の頃生まれた私は秋への想いが何故か強い。今年も秋を満喫できた。

「いつのまにかこんな年齢になっちゃったね。気持はあの頃と変わらないのにね」

と秋の散策の山道で合った友だちと長い時間ばやき合った。

「寒さが凍みるね。冬はいやだね」

と別れたが何故か空しかった。季節は冬に入るとそれと人生の中の冬の時期に私達は入ろうとしていることに気がついたのだ。愚痴ついても仕方ないと思いかえし、過ぎてしまった自分の春と夏の季節を子どもや孫に見る楽しさを感じる事が出来るのに気がついた。

早春に芽が出たばかりのような「なな」ちゃん、頬ずりして抱いていた宝物だ。一緒に遊ぶ時間を沢山つくりたい。遠い日の私もお婆ちゃんよく遊んだ思い出が沢山ある。義務教育をおえた三人娘は春の真つ盛りだ。若さではちきれそう。さ toch ちゃんの輝いた瞳、きぬちゃんのふつくらした頬、黒髪、みのりちゃんの可愛い唇、若いつて美しい。他から見ると羨ましい。でも若い人は自分を表現する一方法だろうか顔、髪、スタイル、ファッションに競って力を入れる。何故だろう。私もあの頃は自分を美しいと思ったことはなかった。低い鼻、お凸、口が尖っている。あげるときりがない程いやなところがあった。色が白くなるというので葎草を煎じて飲んだり母のマダムジュジュを失敬して塗ってみた。そんな頃母は形じやないよ心だよと、美しい心の中からでてくるものがないじと励ましてくれた。効果があつたのかどうか

覚えていない。やってみたい時期があるんだと今になって思う。

息子や嫁さん、婿さんや娘たちは将に夏の季節だと思ふ。暑い陽ざしを受けても強い風を受けても負けないで突っ走っている。仕事も家事も地域の事から子育ても熟している。何か手伝つてやりたいとおもう。自分が子育て時代に欠けていたことを償う気持ちもある。体を休める時間もとらせてやりたいとも思うが、忙しい姿に言いそびれる。夏草の茂りや深緑の木の葉をつけた木々のようだ。形振りかまわずがんばっていた母親時代がなつかしい。

秋風と共に草も木も個性的に彩る。赤系黄系の華やかな紅葉をみせるもの。緑から次々に色を変えていく紅葉もある。水辺、田園、土手などに淡く彩りを添えるもの。里山全体を緑と一緒に彩る木々。葛や烏瓜のように延びるだけ延びても目立たぬ色づきもある。其の紅葉が風や雨、朝陽や夕陽の影響で一層美しくなったりする。人生の後半に入った私はどんな彩りをもつことが出来るのだろう。特殊なことも出来ず大勢の中にいるだけの私は草もみじの紅葉と同じかなと感じている。草もみじの輝きを大切に生きていくつもりだ。夫に聞いてみたいが返事はないかも知れない。私が思うには松かとおもう。紅葉した葉や草はやがて大地で春のために次の芽ぶきの肥しとなっていくのだ。

最近生活の所有面で老人の姿を見る。老人の数が多いいということもあるが、同じ世代に感心があることだと思ふ。人生の冬の時期に入る不安は拭えないが現実は見詰めなければならぬ。今のところ外見では元氣そうに見える私でも体の見えな

世界一小さな物語「一行文」(絵と一行文教室より)

有村政子

・遠くに筑波山 いつのまにかふる里になった

・こんなにもまぶしい朝日は今日はいらない

・あの頃と同じ気持ちで虹をみた

・虹にも手を合わせ

平野みつ江

・要領が悪いから見抜けるのです 要領のよい小狡さを

・その日食べるだけ働けばいいのです

・みつ江という名前は五十七年前 私が生まれたときに

父が出生届してくれた名前なんです

木村靖子

・ゆつくり ゆつたり ほっこり

・年の瀬の蠟梅 いい顔している

・年の瀬に蠟梅の香の響く

・林の中に紅葉が整列して

い所で何が起きているかと時々恐怖さえ覚える。そんな時親戚のある男の人から話を聞いた。

「あと一ヶ月もたないといわれた母親の看病をした。八十代前半を過ぎた母親は痩せた体でベッドに横たわっていた。夜は傍に寝て何の要求にでも答えてやったが襦袢を取り替える時は辛かった。お腹もお尻も脚も肉はなく骨に皮がぶらさげっていた。ぼろ雑布がくつついていては様だった。ついこの前までこの体で動いていたのかと思うと涙が止まらなかつた。一年の大半を着物で生活していた母親から想像もしてやらなかつた姿だった」という。私も知っている人だけにその人の若かつた

頃の姿を思いだし涙が出て仕方がなかつた。

私も木枯らしに絶えられなくなり、霜を踏む足も進まなくなるだろう。肉体はともかく精神はしっかり生きていたいと思う。これまたわからないが、次の世代につながる。生きていくことそのものが次の世代につながる。この実がいろいろな影響や迷惑をかけるかもしれないが、受け取った人がどんな花を咲かせてくれるのかと思うと楽しくなる。

春、夏、秋、冬の季節も良さがいっぱいある。楽しんで生きていこう。

歴史ガイドに同行して(9) 兼平ちえこ

ゆへいこ様ちえこ

初日の昇る

五〇年こ

ちえこ

に今年のお慶び申し上げます。

本年も皆様に、嬉しい事、楽しいこと沢山訪れますことお祈りいたします。

昨年は無差別殺人、親子間の殺人事件、そして突然の無情な雇用打ち切り等、悲しくも怒りの多い一年でした。

しかし、北京オリンピック、パラリンピック、フィギュアスケート、ゴルフ、テニス等スポーツ界の若者の活躍は、大きな誇りと勇気と希望を与えてくれました。勿論ノーベル賞受賞のシニアの皆さんの活躍も感動でした。暮れに行われたボクシング戦は、内藤選手の謙虚さと気づかずに勝利の女神がほほ笑んだと心に残りました。

今年も昨年からの引き続きで「常陸国風土記を歩く会」の皆さんへのご案内コースのご紹介から始めたいと思います。

今回は、現在の石岡小学校敷地内で繰り広げられた歴史のご案内です。⑭常陸国衙跡、石岡の陣屋門、府中城の土塁、箱式石棺、風間阿弥陀、万葉歌碑 ⑮石岡市民俗資料館へと進めて参ります。

⑭・1 常陸国衙跡

石岡小学校敷地一帯は、今から約一三〇〇年前に常陸国の国衙が置かれた場所と推定されています。この国衙を中心として現在の旧石岡市域全体を領域とする常陸国府としての古代都市が建設

され、常陸国の政治、経済、文化の中核的な役割を果たしました。

しかし、この繁栄を極めた古代都市は十世紀半ばに起こった平将門の乱によって破壊され、やがてこの地には南北朝時代（一三三六〜一三九二）から、戦国時代にかけて大掾氏によって府中城が築城されました。大掾氏滅亡後（一五九〇）、幾人かの領主が交替しましたが何れもこの府中城の地に支配の拠点を構えました。そして十八世紀の初頭、水戸徳川家の御連枝（徳川將軍家の一門である御三家の分家）、府中松平氏の領地となつてこの地に府中陣屋が建設され、明治維新に至る約百七十年間、その支配が続いた。近代になると、この一帯は教育施設が相次いで建設された。まず明治六年に石岡小学校が開校、明治四十三年に新治郡立農学校（現在の石岡一高）、大正元年に石岡実科女学校（現在の石岡二高）、そして昭和二十二年には石岡中学校が開校しました。このように、この地は石岡の枢要として古代から近代に至る歴史を重層的に担ってきたのです。

常陸国府の成立は七世紀後半から八世紀初頭である。国府の下に郡衙が置かれ、多珂、久慈、那賀、新治、白壁、筑波、河内、信太、茨城、行方、鹿島の十一郡を統括していた。

常陸国は大国で国府も大規模なものであった。多くの官人や兵役、雑徭のためにやってくる農民たちでにぎわい、国分寺、国衙工房などの施設が存在した。国衙には、国内の政務に携わる行政官の勤務する役所や倉庫群などさまざまな建物があつた。

昭和四十八年、石岡小学校の校舎改築に伴い発掘調査が実施され、多くの柱穴が発見された。そ

の後、平成十年から平成十一年にかけてプール建設に伴う発掘調査では、掘立柱建物跡、溝跡など発見された。この調査は引き続き平成十三年から六次にわたり行い、その結果、この石岡小学校の校庭に国庁が存在していたことが判明しました。常陸国府は、東日本の軍事、経済の拠点として、また宗教文化の中心としての、重要な役割を担っていた。

⑭・2 石岡の陣屋門

県指定有形文化財（建造物）（昭和四十二年指定）石岡の陣屋門は文政十一年（一八二八）二月に建てられた。文禄十三年（一七〇〇）初代水戸藩徳川頼房の五男松平頼隆が府中藩主となり以後明治維新に至る約一七〇年の間、石岡地方は府中松平藩の支配下にあつた。府中松平家は、水戸徳川家と同様定府と定められ参勤交代はなく、藩主は常に江戸に住んでいた。

江戸時代に代官その他の役人が在任した屋敷や役宅は一般に陣屋あるいは陣屋敷と呼ばれていた。石岡の陣屋門は、本柱の上に妻破風造（つまはぶくり）の屋根が付き、本柱の上にも本屋根と直交してそれぞれ別棟の小屋根をつけ、扉と控柱とを覆っている高麗門の形式である。

この門は、石岡小学校の校門となっていたが、現在の市民会館建設の為、昭和四十四年に学校敷地内に移転された。

⑭・3 府中城の土塁

市指定史跡（昭和五十三年指定）府中城は、正平年間（一三四六〜一三七〇）大掾詮国により築城されたといわれる。天正十八年（一五九〇）十

二月大掾清幹が佐竹義宣に攻められ落城した。落城後は、義宣の叔父佐竹義尚が城主となり、慶長七年（一六〇二）佐竹氏の秋田国替後は、六郷政乗がこれを領した。城の規模は東西約五百メートル、南北約四百メートル、本丸、二の丸、三の丸のほか、箱の内出丸、磯部出丸、宮部出丸を備え、また堀、土塁をめぐらした、堅固な城郭であった。現在では、土塁や堀の一部が残っており、当時のしのごことが出来る。台地にしっかりと根を下ろした榎の大木が当時を語ってくれるかのようです。

⑭・4 箱式石棺

舟塚山古墳群第九号墳より出土。この石棺は、石岡市北根本六八一番地より、昭和五十一年の発掘調査によって発見されたものである。

古墳は、今から約一三〇〇年前のものとして推定され一辺約十三メートルの方形を表した古墳で、周囲に幅一、五メートル、深さ六十センチメートルの溝をめぐらしている。

石棺は、扁平な板石を組み合わせた箱式石棺で、内部には人骨二体が埋葬されており、初め一体を埋葬し、後にもう一体を埋葬するという追葬の形式がとられていることが確認された。

関東における箱式石棺の分布をみると、茨城県に最も多く、なかでも霞ヶ浦周辺に濃密な分布を示している。年代的には古墳時代後期（約一五〇〇年前）頃から出現するのであるが、本古墳のように飛鳥、奈良時代に入つてつくられたものの方が数多くみられる。

ご夫婦、それとも親子、ロマンがひろがりです。
（石岡市教育委員会案内版より）

⑭・5 風間阿弥陀

市指定有形文化財（昭和五十五年指定）。

この風の会会員の菅原さんの奥さんがゆかりのご子孫であり、また同じく会員の打田さんが、会報の第十七号で「過去の無い石」のタイトルで紹介しています。

風間阿弥陀は、高さ約一三〇センチ、五輪塔が壊れたような形をしている。小栗城（旧協和町）の守り本尊として祀られていた。応永三〇年（一四二三）小栗城落城の折、小栗十勇家臣の風間次郎正興、八郎正国親子が三河に落ち延びる途中（旧千代田町下志筑）、幼い四代目三郎正三と共にこの阿弥陀を残してきた。それが風間家で代々守り続けている阿弥陀である。「風間家古文書」によると、本尊は地下に埋没し、地上に粘土で固めた像を作製したと言いつたに伝えられている。

柔らかいまるで幼子のような感のする阿弥陀さまに心が温まります。

⑭・6 万葉歌碑

『庭に立つ麻手刈り干し布さらす

東女を忘れたまふな』

常陸守兼按察使（あぜち）に藤原宇合が任命されたのは養老三年（七一九）七月のこと。現在の茨城への赴任であった。平安貴族と違い万葉時代の貴族たちは、きつちりと地方勤務をこなした。宇合（藤原鎌足の孫、赴任時は血気盛んの二十五歳だった）は、無事に任期を全うし、帰任することになりました。当然、帰任に際し国府で歓送の宴が催されたであろう。その宴に侍った女性のひとりだが、この歌の作者、常陸娘子（ひたちのおとめ）であった。常陸娘子が宇合に対してこう歌う

のでした。「庭で育てた麻を刈ったり、干したり、布にしたりするようなあずま女をお忘れなさいますな」と。

「娘子」は若い女性を呼ぶ称であり、今で言うなら「ミス常陸」と言うところかもしれない。古代においては、衣服に関わる生産活動は女性労働であった。そして麻は東国の特産品であり、税としてその多くが都に献納されていたのでした。

宇合については、常陸国風土記を完成させて、大政官に奏上した監修者と考えられている。

東女さんは、情の深い、心の強いお方だったのでしょうか。

⑮ 石岡市民俗資料館

石岡小学校開設百周年記念事業として昭和四十八年に完成された。

発掘調査で見えられた古代の遺物や市民が寄贈した民俗資料を中心に展示している。出土品では、奈良、平安時代の茨城廃寺跡、国衙跡、国分増寺、尼寺跡等から発見された瓦や土器など、そして常陸国分増寺跡、鹿の子遺跡の復元模型も見どころです。寄贈された民俗資料には明治、大正時代に盛んだった、醤油や酒づくりに使われた道具など、商都として栄えたころの資料も多い。一階では昨年三月に終了した国衙跡での出土品の整理が行われています。

開館は、金、土、日、祭日、午前九時から午後四時三十分。入館無料。私事ですが同会館に、一八〇年の命に感激し、描いた陣屋門を展示させて頂いておられます。今回は、石岡小学校敷地内の文化財のみの紹介となりました。

（参考資料・石岡市の歴史と文化財）

“風入会一年

菅原茂美

二〇〇七年十一月、ふるさと“風”の会へ加入させて頂いたとき、アツと云う間に一年が過ぎてしまった。

会報「ふるさと風」は、自分表現紙であり、ふるさとの歴史・文化の再発見と「創造」に軸足を置けば何を書いても構わない。但し、書いたものには、自分で責任を持つこと。そういう約束でこの一年間、色々書かしてもらった。

普通、論文などは、字数・用語・スタイルなどいろいろ制限があり、堅苦しく、なかなか筆を執る気にはなれないものだが、本会報は、かなりその点は自由であり、思いのままが良いとのこと。

ならばと私は、人類が過去に犯した数々の歴史上の過ちを批判するなど、かなり小生意気な筆を執らしていたのだ。

ふるさとの歴史と言われても、私は此処の生まれではないし、会の諸先輩達のように、綿密な調査・研究などしたこともない。但し、私の永遠のテーマは『人間とは何か』。文学や芸術部門は極めて不案内だが、科学的な視点から、進化論的に、人類のマクロの歴史を見ていきたい。

そして、人間の思考や行動の原点は、長かった野生時代にその源があるとの信念から、人間活動の深層心理を、動物行動学などに、そのヒントを得ようとする基本姿勢で臨みたい。

人類は自然界の中で、特別の存在ではない。大脳が少し発達しただけで、基本的な解剖・生理機能など、他の動物たちと殆ど変わらない。もし、進化の途中で、チンパンジーなどに先を越されていたら、太らして食用家畜などにされていた可能

性も有り得た。故に、人類は自然界の単なる一種の動物に過ぎないのだから、いい気になって有毒物質を垂れ流し、枯れ葉剤をまき、空気や水を汚し、他の生物を絶滅させるなど、以ての外である。

もし人類に智慧というものがあるのなら、とくにその事に気が付くべきだ。奢りや高慢さを反省し、謙虚な態度で自然を尊び、子孫が未来永劫住みやすい環境造りに心すべきである。私の基本姿勢は、そういうことなので、今後もその姿勢で書き続けていきたい。

さて、ものを書く場合、フィクションや小説は別として、サイエンスに関するものは、その根拠が明確でなければならぬ。それはどのようにして証明されているのか？…誰にでも納得のいく、明確な証拠が有るのか……。

これまで、歴史物は、勝利したものに都合良いように脚色され、敗者の心は無視。真実とはほど遠い事例が多かったように思われる。

それ故、有史以前のことは、明確な物的証拠がなければもの言えないが、文字が発明され、記録として残されるようになると、色々な思惑が絡み、都合なことはカットされ、都合の良いことのみ記される不確かさが残る。

それに対し、有史以前の研究は、今日では、DNA解析の長足の進歩・同位元素による厳密な年代測定・ボーリングによる物的証拠などにより、客観的証明ができるようになった。例えば数十万年前の気象状況・植生・火山爆発・小惑星の飛来衝突・化石人骨の分析から、およそ何を食べていたかなどが分かる。このように、最先端を行くサイエンスに裏打ちされた信頼性の高い情報を根拠に、これからも人類の過去・現在・未来について、

思いのまま書き続けて行きたいと思っている。

さてそう思つて今月号は、何を書こうかと迷つたが、思案の深い谷底に陥つたら、さあもう這い上がれない。二度目のスランプらしい。

最初のスランプは、ふるさと「風」第二十一号へ、私自身第三回目的投稿の際、何を書いて良いか分からなくなり、かなり困惑した。

初めて投稿した第十九号「狼へのレクイエム」では、人類が野生動物を絶滅させた過去の歴史に、大きな怒りを感じていたので、サラサラと憤懣の言葉を並べ立て、一気に書き立てた。

「風」第二十号の二回目「時間という財産」では、現代人は貴重な時間を何かに追いまくられ、汲々セカセカの人生から一体どんな「創造」が生まれるのかと、世を嘆いた。

ニュートンは、ボケーツと庭を眺め、カントは毎日欠かさぬ散歩から、かの偉大なる原理や哲理が生まれたのだという。スローライフこそ重要、しっかり休養を取り、リフレッシュしなければ、大脳は活性化しない。常日頃、そう考えていたから、すらすらと書けた。

【極論と言われそうだが、ヒトは一極集中で、大都会に集まり過ぎるから、諸々の束縛を受け、心を病む。病んだ心からは「感動」も「創造」も生まれぬ。田舎で自然の畏怖や生命の神秘性に触れなければ、芸術も文化も生まれぬ。パソコン画面と上司の顔色しか見てない人間に、生命躍動に対する感動などあるものか。半年田舎暮らし、半年都会暮らしなら（これを「現代版・参勤交代」と言う人がいる）、両者を理解でき、偏った政治や行政は行われぬ。】
ところが第二十一号（私の三回目）への投稿は

目途が立たない。時間は経つし筆は進まない。書いては消し、消しては書き、ついに万策尽き、ならばと、日頃私の専門分野の動物エッセイとして、多数ストックしてある中の「馬はなぜ走る？」等『動物こぼれ話』と言うことになった。この類の資料なら、お手のもの。もし次にスランプが来たら、「その二」として、そこから引き出せばよいと思つていた。

そしたら、わずか一年で、今回のスランプである。先月号「進化の方向性」で、人類の進化の方向は、決して夢多きバラ色などではない。戦争など歯止めの利かない、「性悪説」を認めざるを得ない方向を示している……との私なりの結論に達し、何とかして人類の叡智を絞つて、打開策はないものか……と述べた。

そこで、ネタが切れたのなら予定通り「動物こぼれ話・その二」を……と思つたが、それでは、あまりにも、安易に過ぎる。確かに毎月欠かさずというのは大変なことではあるが、乗り出した舟他のメンバーも皆頑張っている。ここで音を上げるわけにはいかぬ。よく考えてみれば、ネタが切れたとするのは、浅慮であった。この類の追求は無限の筈である。人間ほど不可思議な、興味の尽きない生き物はない筈だ。

アフリカから極東日本への長い長い『遙かなる旅路』途中で仲間と別れ、再びアフリカへ逆戻りした一群。ヨーロッパ方面へ進出し、黒色色素を失った仲間達。そして氷河期にシベリアからベーリング地峡を渡り、北米・中米を経て一気に南米チリまで辿り着いた仲間達。これらはいずれも、今から七万年前、アフリカを出た時には、わずか数百人程度の集団であつたという。みんな一族。

血縁の深い仲間同士であったはず。それがどうして、今こんなに世界各地で、諍(いさかい)を起こし、全人類を何百回も殺せる大量破壊兵器をたんと蓄え、不穏な世の中となったのか?…知恵を出し合って、国連とか色々な機関が対策を練っているが、これぞ「決定打」というものが出てこない。争って「己が利」のみを追求する…。悲しいかな、それが人類の「進化の方向性」と言うものか?…それが前号までの主旨である。

大型類人猿たちと、次から次と枝分かれし、七〇〇万年前、アフリカでついに直立二足歩行を始め、ヒトへの進化を遂げてきた。多くの化石人類を経て、最終アフリカ東部エチオピアで、化石人類最後の原人「ホモ・エレクトス」が、今から二十万年前、最後の突然変異を起こし、我々新人「ホモ・サピエンス」を生み出し、自らは肅々とこの世を去っていった。

そのアフリカを旅立った仲間達は、当然、血縁が深いわけである。ところが、旧石器時代から縄文時代にかけての狩猟採集時代までは、仲間同士はとても協調的だが、その後、弥生時代以降どういうわけか、近隣同士で、とても仲が悪くなる。人口が増え、密度を増すと、一層憎しみを増す。悲しい性(さが)である。

我々日本人についても、大部分はバイカル湖付近に源を發し、モンゴル・旧満州・朝鮮半島・日本列島へと進み、ヒトのDNAは勿論、人類に付随して移動したイヌ・ネコ、ノミ・シラミ、ヒエ・アワなどのDNAも極めて近似である。その旅人達はみな同族に近い。それが今、核だ、拉致だど唾(いが)みあう。本来同根なのに。

人はなぜ、『オレは、他とは違うぞ』と誇示する

ようになったのか?…自分の格付けを高めることに必死になる。勿論通念上、序列が上なら、より豊かで安定した生活ができたであろう。これは、野生動物でも同様の序列闘争は見られる。以前にも書いたが、これぞ「生き物の本性」なのである。しかし、相手が恭順の意を示せば、動物はそれ以上の攻撃はしない。ところが人類は、トコトン相手をやつつけなければ気が済まない。このように人類が歩んできた進化の方向性は、「万物の霊長」などと自慢できる姿ではない。むしろ弱肉強食の酷(むご)さが残る。

* * * * *

以上前月号に続き、人類の本性の醜さを見てきた。しかし私とて、人の裏面のみを見る頑固一徹の臍曲がり居士ではない。人間は一から十まで、醜い背面だけではなからう。欠点のみを指摘しても仕様がなない。なにか素晴らしい面も有ったからこそ、それが原動力となり、今日の人類繁栄の基礎となっているに違いない。その原動力が何だったのかを考えてみたい。

そこで思いつくのは、弥生時代以前の旧石器時代から縄文時代の人々が、その日その日の食糧蒐集で精一杯の筈なのに、石槍・石鏃・石斧などの石器が、あまりにも美しい左右対称の芸術性を示す。機能を越えて、視覚に訴える美しさを求める「こだわり型」等、明確に哲学が存在したと考えられる。縄文人を、ヒゲモジャの野獣のような野蛮人…などと考えていたら、大間違いだ。後の偉大な文明を生み出す兆しは、すでに芽生えつつあったのだ。

今我々が思えば、旧石器時代や縄文時代なら、石器は機能さえ果たせば、チットくらい荒削りだ

ろうが、でこぼこだらうが、どうでも良さそうなものだ。それなのに、あのように精巧に、しかも美意識をはっきり頭に描いたこの「心意気」に、文化の芽生えを感じさせられる。

また縄文土器は、低が狭く不安定で、入り口は波打っていたり、多くの飾り物がくつついて、かなり実用的ではないとのこと。

更に洞窟の壁や切り立った岩壁に、動物画や線刻画等。現代人はノルマに追われ、汲々としているが、太古の人々の方がずっと優雅でロマンチックにさえ見える。どちらが真の文明人?

いずれにしても、縄文人は、自然の中に「神」を感じ、自然を略奪する事の愚かさをはっきり認識し、超自然的なものを敬い、仲間の遺体を丁寧に葬り、宗教的な感覚が芽生えつつあったことは確実だと言われている。

こうして見てくると、縄文時代には日本列島に十万人という、今思えば「適正規模」の人口密度で、単なる生存だけの生活ではなくなった。環状集落を形成して定住し、集団としてのまとまりができてくる。そして他の群との交易・芸術の萌芽・遺体埋葬や原始宗教の芽生えなど、その行動に「人類の醜さ」は見あたらない。

結局は弥生時代を迎え、大陸から多数の難民(一〇〇万人)が一举に列島に押し寄せてきて、覇を競い、戦乱に明け暮れる。あたかも大陸での内乱の延長戦を、日本列島で蒸し返している形となり、人類は加速度的に醜さを増す。

そして後に成立する「朝廷」とやらが、拙速無謀な統一国家を画策。東北地方などで平穩に暮らしていた縄文人の子孫・アイヌなどの先住民を、平安初期、坂上田村麻呂が征夷大將軍となり、蝦

夷征伐と称し、陸奥の安穩をかき乱す。

平安後期には再び源義家（八幡太郎）親子が、前九年・後三年の役で、陸奥の平和な暮らしを破壊する。そして歴史上だめ押し汚点の、源頼朝の猜疑心から弟義経を討つ名目で、結論として、鎌倉幕府は、万民が平穩に暮らす極楽浄土を夢見た「平泉」を、徹底破壊した。

一般的に「歴史書」は、勝者の論理で、勝利者に都合良く書いてあるだけ。勝者を正当化し、敗者を悪者扱いする茶番劇のストーリーとも言える。それは世界のどこへ行っても皆同じ事。

南北米大陸の先住民九〇〇〇万人の九十%を抹殺した白人侵略者共に、後日、反省の言葉や懺悔の言葉など、はたしてあったらうか？

私が中米に滞在した時、現地メステイソン（白人とインディオの混血）に、『あなた達は、インディオの血を引くことに誇りを持つのか？それとも白人の方？』と訪ねた。すると彼らは怪訝な顔をして『そりや当然、エスパニーヤ（スペイン）』と答えた。私は勿論かの偉大なるマヤ文明を起こした誇り高いインディオと言う返事が返ってくるものと信じていたのに……。

あの白人共が、アメリカ先住民をどれだけ酷い目にあわせたか。大量虐殺して、生き残った者を奴隷にした。フロンティア・スピリットといえどカッコいいが、先住民を略奪制圧する西部開拓などで、奴隷が足りなければ、更に、アフリカで黒人を「拉致」三昧。そんな事件は、ほんの数百年前の話ではないか。

アメリカ合衆国第十六代大統領リンカーンが、奴隷解放を宣言したことには、拍手を送りたい。侵略白人にも良心のかけらは、あったらしい。

しかしリンカーンはアツと云う間に暗殺された。誰がやったか知らないが、やはり、かの国は、「己の利」を追求するためには、手段を選ばず、なんでもする国のように見える。

【とは言え、覇を競う世界情勢の中で、身を呈して紛争解決や、難民救済などに、活動を続ける個人や団体も多数見受けられる。暗闇に、一筋の光明を感じる。人類の歩んできた道程は、醜さだけではない事は、百も承知なのだが……】
いい歳をして、もうそろそろ『吠え止まりにしたら……』と、天の声が聞こえるが、焼けぼっくりに火がついたら、どうにも止まらない。

2009年ギター文化館発

「常世の国の恋物語百」定期公演予定

- 第12回公演 2月22日（日曜日）
第13回公演 4月19日（日曜日）
第14回公演 6月21日（日曜日）
第15回公演 8月16日（日曜日）
第16回公演 10月18日（日曜日）
10月は三周年記念として18日を最終日とし
5日間連続公演を予定しております。
第17回公演 12月20日（日曜日）

「ことば座ふるさと夢クラブ」特別年会員募集のご案内

「ことば座」は、石岡で生まれた新しい舞台表現「朗読舞」で「ふるさと」を謳い演じていこうと、小林幸枝を座長に設立した劇団です。ことば座ではギター文化館を拠点に2007年2月18日に旅立ちの日を迎え、年6回の定期公演を中心に「常世の国の恋物語百」へ挑戦しております。ことば座では、聾啞というハンディを自分と与えられた天性の才能として捉え、スケール感溢れる舞台表現を創りだす世界最初で、世界にただ一人の朗読舞女優：小林幸枝を応援する「ことば座ふるさと夢クラブ」を設立し、特別年会員を募集しております。多くの皆様の暖かいご声援、宜しく願いいたします。

個人会員（年会費 10,000 円）

法人・団体会員（3口年会費 30,000 円 5口年会費 45,000 円 10口年会費 80,000 円）

ことば座 〒315-0013 茨城県石岡市府中 5-1-35
0299-24-2063 fax 0299-23-0150

Coffee & Tea Room

《ふらの》

ピザ・パスタ・アレンジ蕎麦・
蕎麦会席料理のお店です

（ギター文化館通り）

看板娘（犬）「うらら」ちゃんが
皆さんをお迎えいたします。

営業時間 11:30～15:00

16:00～18:00

月・木曜日が定休日です。

電話 0299 43 6888

東京都内の旧家に「源氏物語」の全五十四帖が揃った写本のあることを専門の学者が確認した—という記事が新聞に大きく載っていた。紙であるから完成してから千年も経っていて残されることのほうが奇跡のようにも思えるが、源氏物語は紫式部自筆の原本は残っておらず、写本も揃ったものが極めて少ないのだとか。

国文学の研究者によれば「源氏物語」は最初の原稿(草稿)があり、他に推敲のための自筆の原稿が二種類あった。つまり式部自筆の原稿は三種類あつて、そのいずれもが清書複製の段階で無くなった—幾ら平安時代の紙でも作業中に溶ける訳はないからネコババされてしまった。

特に草稿は式部が自室に大切に保管していたのだが最高権力者の藤原道長が娘(三条帝中宮)のために黙って持出してしまったらしい。今ならば「首相の軽犯罪」で非難されるところである。

印刷機もコピー機も木版も無かった時代、本は手書きで作られた。源氏物語のような長編は一人や二人では完成させられない。著者別人説もあるのだが、まずは紫式部が頭に浮かんだラブションを忘れないうちにメモして置く。それを後宮に仕える女官や女房たちが興味半分のお手伝いで興奮しながら書き写すから、他人より早く読める。

中には「この部分は、もっと濃密に！」などと注文するスケベな女官が居たかも知れない。原本は盗まれても、こうして書き写されたものが何冊も出て後世に伝わったのであろうか。

もう一つ貴重な史料が消滅した原因には「御所の火災」がある。照明や暖房のほか、病気の治療

や怨敵退散、慶弔行事のご祈禱などには盛んに火を使っていた時代だから、うっかりすれば火災になる。已むを得ないかも知れないのだが：

時代は違つても生活様式は同じと思われるから例に挙げると、徳川家康が入城してから百年間の江戸城で発生した火事が二件、これに対して平安京内裏では、桓武天皇の延暦十三年(794)に長岡京から遷都して以来、百六十年後の天徳四年(960)に村上天皇の御座所近くから出火して御所の中心部を焼いたのを手始めに、後三条天皇の治暦四年(1068)までの約百年間で、放火を含め二十数回の内裏火災が記録されている。

室内の照明に松明は使えないから蜜蝋・蠟燭・灯油などを使ったのであろうか？灯油は獣の油脂から始まったと推測されることが常陸国風土記に書かれている。菜種・荳胡麻など植物の油や臭い水と言われた石油も早いうちから使われていた。

油を注ぐ際にこぼれるので燭台の下に特殊な布を敷いて置く。汚れたら拭いたり交換したりすれば良いのだが、横着すると漏れた油で燃え易くなり、チャラチャラした服装でいる公家や女官たちは油の掃除など苦手だから火事も増える？

前号の「(二)」では、寛弘六年(1009)の正月早々から紫式部や伊勢大輔が不可解な事件のトバッチリを受け、その事件の根となる出来事があったことを紹介したが、それ以外でも、その年は「我が世の春」を謳歌する貴族たちにとって良い年なのか悪い年なのか、ベテランの陰陽師が首を傾げるような一年であった。

式部や大輔が気にかけていた藤原伊周(ふじわらのこれちか—定子皇后の兄・右大臣)は、道長の孫である敦成(あつなり)親王らを呪詛した疑

いで停職の処分を受けていたのだが、四か月で処分が解かれ宮中への出仕が許された。それ以後の伊周は、権力者の藤原道長に尻尾を振る他の公家と同じになり、その後の寿命は半年だった。

七月二十八日には一条天皇の伯父(村上天皇皇子)である具平(ともひら)親王が四十代で亡くなった。前年の夏には、この親王の母親の盛大な葬儀が行われたばかりだから、公家たちは連年の真夏の葬式にウンザリしたのだが、具平親王は道長の嫡男・藤原頼通の舅であるから文句も言えず、神妙な顔で葬儀場へ向かった。

具平親王は当時の優れた人材の中に挙げられており特に字問(漢詩)の才が伝えられる。その頃に流行した怪しい天皇が出なければ皇位にも就ける立場にあった。

宇治の平等院を建立したことで知られる頼通は三代の天皇(後一条、後朱雀、後冷泉)に仕えて五十余年に亘り摂政関白を務めたのだが、父親の威光で地位を保つたなどと言われている。

しかし父親に似ずに良い性格だった様で、源氏物語の「夕霧(光源氏の長男)」のモデルは頼通とする説があり、少年時代の頼通について紫式部は「…皆が子供扱いをしているが、しつかりした貴公子である…」と日記に記しているという。

その人物を見込んで、具平親王は長女の隆姫を嫁がせた。二人の間に子供は生まれなかったが、夫婦円満：そこに邪魔が入ることになる。

三条天皇の時代になり、道長との間がシツクリしない天皇は何とか関係を保とうと努めて、嫡男の頼通に禊子(しし)内親王を娶わせようとした。

一夫多妻は当然の時代なのだが、隆姫の心情を察した頼通は板挟みで悩んで病気になるかと伝えら

れている。現代のような人物である。結局、禊子内親王は頼通の弟（教通）に嫁した。教通も関白にはなるが、高齢になってからである。

寛弘六年に戻って、葬式騒ぎと重なる頃に後宮では彰子中宮の二度目の懐妊が発表された。残暑を避けて出産準備のために中宮は土御門殿（上東門第）へ移ることになった。紫式部や伊勢大輔らも大勢の女官や女房らと共に引っ越しをするのだが今と違い電話一本で片づけてくれる専門屋がいた訳ではないから、大掛りな行事になる。

土御門殿は藤原道長の正妻・倫子が父親（宇多天皇の孫）から相続したもので、後に彰子の妹（三条天皇の中宮）妍子（けんし）の屋敷になる。

その頃の記録を見ると前々号「(一)」で書いたように寛弘二年の火災で御所が焼け一条天皇は道長の東三条殿に避難し、翌年には内裏の工事が始まったので、近い場所にある道長の別邸に遷り、その後は完成した御所に戻ったと思うのだが時期が分からない。前号の「(二)」で紹介した「呪い札事件」が起きた場所というのは、再建された御所内の床下とも考えられる。

いずれにしても、それは現在の京都市内に残る観光名所の京都御所ではない。現在の御所は南北朝争乱が収まってから天皇の仮住居（里内裏―さとだいら）として造られたものとか、平安遷都からの御所は、京都駅から北西に向かう山陰本線が二条駅を過ぎて市内中心部で大きく左に曲がる辺りを南の端として置かれていた。そして「観光用京都御所」こそが今回、彰子中宮が宿下がりした土御門殿の跡とされているのである。

寛弘六年十月五日の夜、自慢にはならないが通算八回目の御所火災が発生した。一条天皇は既に

内裏の火事を三回も経験しているから落ち着いたもので「またか！」と呆れながらも、消防隊と言うほどでもないが手桶をぶら下げた程度の編成に期待し公家に囲まれながら元気に逃げてきた。

道長は家臣を従えて途中まで出迎え、土御門殿から鷹司小路と烏丸小路を隔てた琵琶殿を里内裏として提供した。火事は消防隊の活躍に関係なく燃える物が無くなって消えた。折角、建て直してから幾らも持たなかったのだが、今回の火災では「延喜天曆の治（えんぎてんりやくのち）」と呼ばれた醍醐天皇・村上天皇時代（菅原道真の登用など天皇親政の時代）の記録が失われた。焼けては建てる―その莫大な費用は国民が泣きながら徴収される血税である。

彰子中宮以下の女性陣は、何本かの大路を隔てた土御門殿に居るから半鐘が鳴ったりサイレンの音が聞こえる訳ではないが火の手は見える。風が無ければ類焼の心配はいらないけれども、女官たちが騒いでいるから中宮の耳にも入る。

「帝はご避難あそばされたであらうか？」
中宮には火事を知らずに欲しい式部だが声を掛けられれば返事をしなくてはならない。

「ご案じなされますな。宿直（どのい）の者たちが付いております。一の上様も、お人を遣わされた筈ですから、今頃は仮御所に向かつておわすことでしょう。知らせを待ちましょう。」

宿直の者がシツカリしていれば、火事など起こすまいに…と思いつながら、式部は懐妊中の中宮に安心させることだけを考えていた。

程なく玄関先に道長からの使者が来て式部が呼ばれ、一条天皇が無事に琵琶殿に入ったことが知らされた。暗い廊下を走るようにして中宮の座に

転がり込んだ式部は大声で報告をした。

「帝はご無事にて琵琶殿にご避難遊ばされた由にごさいます。お供の方々もお怪我などないとのことにて、先ずはご安堵くださいませ。」

中宮様にお障りがあつてはなりません。お見舞いなどは明日ということにして、お心安くお休み下さいますように…との一の上様からのお言づけにごさいます。」

式部は女官の長に目配せして中宮を寝所に導かせた。それから伊勢大輔に耳打ちして行く先を告げると、玄関先に居る警護の者から手燭を借り、一条烏丸小路を琵琶殿に向かった。既に火事は消えている。時々火事見物の人にも会うが、暗闇を取り戻した都の高級住宅街は初冬の夜風が襟元にしみて吹きとおる。

「一同無事」の知らせは受けたが、心細やかな中宮の心情を察する式部は具体的な情報欲しいのである。この夜に焼けたのは新築したばかりの内裏中心部であるが、隣接する蔵の一部が燃えて貴重な記録が灰になった。

仮御所となった琵琶殿の周りには篝火が焚かれて警護の武者たちが厳重に固めている。暗い小路から灯りを差し出すようにして近づいてくる式部を見て、何人かが太刀に手を掛けながら走り寄り確かめたが、その中には式部を見知った者がいて「これは式部様！」と声をかけてくれた。

紫式部は父親の官職だった「式部丞（しきぶのじょう）」を名乗っている。この官位は警護の武者たちにすれば連隊長級のものであるから思わずたじろぐ。式部はここぞとばかり叫ぶ。

「中宮様のお使いにて紫式部が帝のお見舞いに罷り通る…門を開けよ！」

「はっ」と平伏する武者たちに「お勤め御苦労である！」と声を掛けて式部は琵琶殿に入った。

平将門の乱で集団武力の脅威が人々に知られるようにはなったが、当時は未だ武士の地位が低く有力な武将でも公家に隷属する家臣のように扱われていた。警護の武者たちなどは権威に弱い。冷静に考えれば、後宮の一女房が一人で天皇の見舞に来る訳はないのだが…

大見えは切ったものの、琵琶殿内に入り込んだ式部も困った。大勢の公家が困んでいる天皇の無事をどうやって確認するか…玄関先で右往左往している男女の中に、道長の近習を見つけた式部は手招きで呼び寄せた。

「殿下にお目通りを願いたい…」

家臣は中宮の使いだと承知しているから、心得て奥に走り、直ぐに迎えにきた。

「…おお、式部殿、良く来られた。それにしても何を遠慮しておられる…」

「この度のこと、ご災難ではありましたが帝を始め皆様ご無事の由、何よりと存じ上げます。一の上様には早速のお手配、感服仕りましてござりまする…」

「…うむ、中宮にもご心配をお掛け申したことに案じておるが…」

「早々とお知らせを頂きましたので、既に中宮様にはお休み願っておりませんが、ご心中にては帝のお見舞いに参上なされたき思いがお有りのことと拝察申し上げて、実はそのことを帝に言上願いたく、且つは、火災の詳しき様子など分かれれば中宮様にお伝え申そうかと、私の独断にて参上致しました…ご無礼の段は幾重にもお詫びを申し上げます…」

「そうであったか…いやいや、いつもながらの式部殿のご配慮、中宮へのお気遣い、道長ほとほと感服仕った…帝には早速、中宮のことを言上致そう…火事は誰かが燭台の油をこぼした俵で拭き取らずにおいたところへ、粗相に灯りを落として燃え広がったものらしい。追って厳しく調べさせて火の扱いを注意させねばならぬ…火事による怪我人などは無くてよかったのだが…」

ここで道長は声を落とし、辺りを見回してから式部を手招きで寄せて耳許に囁いた。

「…実はのう、お蔵を焼いてしまつて…あの蔵には是までの政（まつりごと）に関する記録が納めて有つたのだが…恐らくは全てが灰になつていると思う。未だこのことは帝にもお知らせしておらぬ。勿論、中宮には伏せて置かねばならぬことなのだが…内裏が焼けたことより、このことは国の大きな損失になる…私はそれが一番い心にかかるのじゃ…どうか式部殿、政を行う者の心中をお察し下され…」

式部は今回の火災の重大性を知ると共に道長という人物の一面を知つたようで、暫くは二人の間に漂つた沈黙を大切に胸にしまつていた。

深夜のことなので、道長の家臣が琵琶殿から二人の武者を付けてくれた。土御門殿の門で半ば居眠りをしていた警備の者が、式部の姿を見て慌てて誰かを呼ぼうとする。式部はそれを制して門を開かせ自分の部屋へ向かった。

「お戻りが遅いのでご案じ申しておりました…風が寒かったですでしょう…」

廊下に声がして伊勢大輔が出迎えてくれた。

「待っていて下されたのか…申し訳ないことでした…中宮様はお休みでしょうか？」

「はい、宿直の者以外は起きておりませぬ」式部は、中宮には明朝一番に報告をしようと、大輔に改めて礼を言つてから、あらましのことを語り、寢床には入つたが疲れとも違う何かが作用してなかなか寝付かれなかった。

自分の雇い主である藤原道長に対して、是までに持っていた個人的な感情は「話に分かるが油断の出来ない人物」という印象であり「男の魅力はあるが近寄り難い」ものであった。

しかし今宵のように大事に際しての対応の仕方と手際の良さは誰も真似が出来ない。確固たる自信で物事を処理する。その反面に人間としての弱さや脆さを隠そうとしない。権力者としては異質であるように思える―これは世上の噂のような単なる冷酷な権力者では無いのかも知れない―御所の火事騒ぎを機に、紫式部の心の中で主への感情が変化してきた。

翌日からは、形式的ながら中宮の許に近火を見舞う公家などの来訪が続き、また中宮から天皇や皇族に見舞いの使者が遣わされて多忙を極める日々が続いた。彰子中宮は産み月まで一か月余となつていたので、一条天皇の来訪時を除き土御門邸での来客は、中宮が奥に坐し、挨拶は式部が代行していた。

琵琶殿に避難していた天皇は、そのまま琵琶殿を仮御所とすることになり、火事場を確かめてから十月十九日に正式に遷幸した。

火事の話が消えかかる十一月二十五日には、土御門殿において彰子中宮が一条天皇の第三皇子である敦良（あつなが）親王を生んだ。後の後朱雀天皇である。藤原道長が天皇の外祖父として権力を握る理想的な形が出来上がった。

さて唐突ながら、美空ひばりが歌った一節にも
「♪…人の恋路を邪魔する奴は…」という文句があるから、あまり詮索はしたくないのだが藤原道長と紫式部との間に恋愛関係があったかどうか？
軍国主義華やかなりし頃、天皇制ファシズムによる支配体制を強化するために、旧公家上がりの無能な首相が大政翼賛会などという組織で国民を束縛していた。男子は国民服で女子はモンペ姿を強制され、都会のダンスホールで働くオネエサンたちまでも竹槍で軍事教練をさせられたほどだから自由恋愛などは犯罪扱いをされた。

その頃に粗末な紙で出版された「日本史」には藤原道長と紫式部の恋愛話が載っていた。珍しいことだと読んでみたのだが：何と、紫式部は権力者の誘いを断固として断った「貞節の鑑」として無理に？操を守らされたことにされている。

当時の公家社会は「自由恋愛の宝庫」だったように、例えば貴族の屋敷で乳母を採用する場合の試験などは何処かの教職員採用試験ほどではなくても、かなり乱れていた。採用かどうか決めるのに暗がりでも乳母の身体検査が行われ、検査官も受験者も、なぜか裸になっただけらしい。

権力の座を目指す道長にとって最初の切り札となったのが彰子中宮である。その中宮の家庭教師となれば両者が全幅の信頼関係で結ばなければならぬ。二人が恋愛をしても誰も咎めない。

ある夜、後宮の一室で寝泊まりしている式部の部屋の戸をホトホト叩く者がいた。相手を確かめればよいのだが、式部は黙っていた。翌朝、戸を叩いた道長から歌が届いた。

「夜もすがら水鶏よりけに鳴く鳴くぞ

槇の戸口を叩き侘びつる」

そこで式部は返しの歌を送った。

「只ならじ戸ばかり叩く水鶏ゆえ

あけてぞいかに悔しからまじ」

夏水鶏（くいな）の鳴き声が戸を叩く音に聞こえるらしい。大日本帝国の方針に反抗するようでは長命なN元総理に怒られそうだが、この返歌だと「折角、誘って下さったのに戸を叩くだけで声をかけない貴方が悪いのですよ」と、次の機会を予約したように思える。

固いことを言えば学説では道長と式部の恋愛について「○」と「×」の二論があるようで、水鶏の歌が寛弘六年の後半頃、それから余り長くない時期に予想だにできなかった展開を辿る式部の運命から推察すれば、私は「○」をとる。

二人の主役がお付き合いを始めて（と仮定して）その年が明けた。寛弘七年（1010）の一月二十七日に亡き定子皇后の兄（儀同三司・藤原伊周）が三十七歳でお騒がせの人生を終わった。淋しい葬儀であつたらう。

二月からは内裏の再建が始められたと思うのだが記録では「一条院造営」となっている。これが内裏なのかどうか：一条天皇は翌年には譲位するから隠居所を先に造った？（焼けた内裏はどうせまた燃えたと見越して後回しにされたのか）分からない。ともかく一条院は十一月に完成した。

引越しの頃に、村上天皇の皇子で「安和（あんな）の変」の中心人物にされてしまった気の毒な為平親王が、現在で言えば法務大臣在職中に他界した。本来ならば、同母ながら狂気の冷泉天皇が即位せずマトモな為平親王が第六十三代の天皇になる筈であった。

父親の村上天皇も、この皇子の即位を望んでい

たとされるのだが、この人は醍醐源氏・源高明の娘を妻としていた。夫婦に男子が生まれて皇太子になると藤原氏の出番が無くなる。そこで道長の伯父ら藤原北家の連中が策謀を用い「安和の変」という菅原道真公追い落としの二番煎じのような猿芝居を仕組んだ。源高明は失脚させられ為平親王の即位は阻まれた。安和の変で邪道ながら活躍したのが清和源氏中興の祖・源満仲である。

円融天皇（冷泉天皇の弟）の子である一条天皇は藤原道長の姉・詮子を母親とする。一条天皇には定子皇后との間に敦康親王があり、彰子中宮との間には敦成親王と敦良親王が居るから、藤原系で皇位を繋ぐ人材には困らなかったのだが、話が少し込み入ってきた。

道長や、道長を鼻根にしている姉で一条天皇生母の詮子にも、三十年ほど前に死亡した超子（ちようし）という名の長姉（ちようしのちようし）が居り、冷泉上皇の後宮に入つて居貞（おきさだ）親王を生んでいた。この親王は小学生になるかならないかの年齢で母親を失ったのだが、問題を起こした花山法皇の弟で当然、皇位継承権がある。

花山法皇が道長の父や兄らに騙されて坊主頭にされたため、六歳で即位させられたのが円融系的一条天皇であるから、一条天皇自身も冷泉系に負い目を感じている。

道長にしてみれば娘の彰子が生んだ二人の親王を早く皇位に就けたいのだが未だ保育園児であるから少し早い。そこで一条天皇に少し疲れが見え始めたこの時期に、姉の遺児でもある居貞親王を即位させて自分の影響力を保持しようと考えた。

これにより、定子皇后が生んだ第一皇子の敦康親王は聡明とされながら即位への道を断られた。

寛弘八年に入ると、一条天皇の健康は優れなくなり政務も苦痛の様子であった。補佐する道長にすれば、政治理念を持つている天皇は政務から遠ざかってくれたほうが都合が良い。

当時の医療機関は皇族・貴族らのためだけに宮内省に典薬寮（てんやくりょう・くすりのつかさ）があり長官（頭・かみ）以下の医師や産婆、看護師、針師、按摩師、薬剤師、呪術師などが居り、付属機関に薬園、茶園、枸杞（くこ）園、乳牛園や薬草専門の井戸などが備わっていた。

至れり尽くせりのようだが、肝心の医療手段が薬草主体の怪しいものだったようで、本当か嘘か大小便を用いたという話も伝わる。効き目はどうでも説経や呪術も重要な医療手段だった。

「…近頃、帝のご様子が心配でならぬ…」
その日は雲ひとつない五月晴れなのに空を見上げた彰子中宮がポツリと呟いた。

「典薬頭のお見立てでは、お気疲れと気候の変わり目で、お身体の調子が少し乱れておられる…と伺っておりますが…」

季節は徐々に梅雨の時期に入ろうとしている。紫式部は、一条天皇が叔父であり義父でもある道長の権力に抑えられて自分が理想とする政治を實行できない―その鬱屈した思い（現代なら「ストレス」で片づけられる症状）が病気の原因では無かるうか―そう感じていた。七歳で即位した天皇も既に三十歳を越えている。

「帝は、お心が繊細で優し過ぎるところがお有りだから…」

中宮は言葉は切って、式部のほうに引き直り、母親らしい顔つきになって言った。

「…そなたも居貞親王のことは承知しているで

あろう…」

「はい、皇太子に立たれて久しいとか…」

「皇太子は帝よりも五歳ほど年長であられる。帝は前からそのことを気にかけておられるご様子であられた。お加減を悪くされてから、どうもご譲位のお気持が強くなられたのではなからうかと…それはそれで致し方の無いことではあるが帝には敦康親王も、そして敦成親王も敦良親王も居られるのだから…」

式部は敢えて答えなかった。彰子中宮は父親の道長に似ず、地位に奢ることなく心根の優しい女性であったとされる。それだけに一条天皇の譲位による皇子たちへの影響を慮りつつも、口には出せない母親としての不安が、式部には痛いほど伝わってくる。今は彰子中宮の憂慮を晴らす答えが式部には無い。

一条天皇の皇太子となっている居貞親王には、道長の父（兼家）の従兄弟である藤原濟時（なりとき）の娘・城子（せいし）が入っていて何人かの子があるのに、前年には道長が彰子中宮のすぐ下の妹の妍子を強引に入内させた。

妍子は、後に後三条天皇の母となる禎子（ていし）内親王しか生まなかつたが、城子中宮の長男である敦明（あつあきら）親王は既に運転免許も取れる年齢に達していた。居貞親王が皇位に就けば皇統が変わる可能性が高くなる。

ぬかりの無い道長のこと、既にその辺りの布石は打つてある―式部は推測していたが、中宮には在り来たりの慰めしか言えない。

「帝のご加減さえ回復されれば、中宮様のご心配などは吹き飛んでしまいますよ！道長様も帝のご意思と将来のことは十分にお考えの筈…」

六月に入ると事態は急転した。一条天皇の病状が悪化したのである。病名は不明だが、ある野史に「…さらでだに堪え難き夏の日に、暑氣玉體を犯し奉り…」とあるから、心労で氣力が衰えた時に熱中症に罹ったのであろうか。

死を予感した天皇は十三日に居貞親王への譲位を告げた。第六十七代・三条天皇が即位し皇太子には四歳の敦成親王が立てられたのである。譲位の話を受けたとき三条天皇は、成人間近の敦明親王を皇太子にするよう要求した。

一条天皇はそれでも良いと思つたが、当然ながら道長が異議を唱え、皇太子は一条天皇の系統から選ぶべきことを主張した。一条系の筆頭候補は定子皇后が生んだ敦康親王である。定子皇后亡き後は、彰子中宮が養子のように面倒を見ていたとされる。しかし既に述べたように、道長は敦康親王の名を名簿から消していた。

「式部の言うたとおりに敦成親王が皇太子になりました…私は順序として敦康親王を推していたのでしたが…」

皇太子発表に複雑な表情で、それでも嬉しさは隠しきれない様子でいる中宮を制して、式部は中宮に近づき小声で言った。

「帝のことに口を挟むのは恐れ多いのですが…ここで、もし敦明親王が皇太子となられ、次に即位されたならば、狂氣と噂された冷泉のお血筋がずっと続くことになるのですよ…天子様は一点の曇りがあつてもならぬお立場です。英明な一条帝のお子様を継承すべきなのです…」

「しかし今上帝（三条天皇）は、それならば次こそ敦明親王を皇太子にと強く主張されておられるそうではありませんか…」

「中宮様！今上帝は既に私と同じくらいのお歳ですよ。敦明親王も成人となれば、次の次のと仰せられているうちに、増えていくのは年齢ばかりではありませんか…」

式部は自分でも驚くほどの大胆な発言をした。

事実はその通りで敦明親王は敦成親王の後に皇太子となったが皇位に就くことは無く、三条天皇以降は彰子中宮の生んだ二人の親王が即位し、敦良親王（後朱雀天皇）と禎子内親王（彰子中宮の姪）の間に生まれた後三条天皇の系統が皇統を継ぐ。

寛弘八年六月一九日、肩の荷を降ろした一条天皇は髪を切り一条法皇となった。既に病状は重体に近い状態にあり二十二日、三十一歳で崩じた。

数え年の七歳で即位してから、二十六年間に亘る治世であった。その時代こそが女流文学を中心に絢爛たる文化の華が開き、また優れた人材が出たとされているが、藤原道長の専制に全てが覆われた時代でもあった。

天皇崩御の前日に見舞いに訪れた彰子中宮には辞世の歌が残されたと伝えられる。

「露の身の草のやどりに君をおきて

塵をいでぬることぞかなしき」

未だ幼き頃に、父親の野心から入内させられた彰子中宮は、一条帝に子供のように愛され最も甘えてきた女性である。回りに固唾をのむ大勢の廷臣たちの前で、中宮は人目を憚らず泣き伏した。

さて、当然のことながら先帝の葬儀は厳肅に盛大にかつ整然と行われた。さらには新帝の即位式があり、またヤヤコシイことには三条帝の父親の「狂気」と烙印を押された冷泉上皇も嫌がらせては無いと思うが息子の即位式の直後に他界した。それやこれやでテンヤワンヤの日々が続いたが、

藤原道長の総指揮のもとに公家たちが走り回って年内に全てが片付いた。

紫式部たちは悲しみに打ち沈む彰子中宮を力づけつつ宮廷行事に参列していたが、その中に思いがけない人たちを見出した。花山法皇への不敬やら疑問のある呪詛事件で失脚した藤原伊周の罪に連座して、公家社会では再起不能と思われた高階一族が居たのである。

その一人は、定子皇后の母親（儀同三司の母と言われる貴子）とは従姉弟になる高階業遠（たかしななりとお）であり、どういう繋がりがあったのか藤原道長の腹心として走り回っていた。この人物は人柄も良かったうえに、事件の時には地方官として遠方に勤務していたため関与を疑われずに済んだらしい。

もう一人は敦成親王呪詛事件で疑われショック死した高階明順の子・成順（しげのぶ）である。父親が本当に無実だと分かって復権したようである。一条天皇葬儀の実行委員を務めていた。

紫式部も伊勢大輔も実家が学者の家であるから同業とも言える高階家の衰退に心を痛めていたのだが、業遠や成順の活躍する姿を見かけて心から「良かった」と思った。運命は予見が難しい。

やがて高階業遠の子の成章（しげあきら）は、式部の遺児・藤原賢子の夫となり、そして高階成順は、ほぼ一年後に伊勢大輔と結婚することになるのだが、この結びつきは「万事メデタシ」だけでは終らず、本人や子孫が後世の歴史に奇妙な形で名を残すことになる。（別稿）

一条天皇と同じく自分の姉を母とする天皇の即位で、藤原道長は引き続き外戚としての地位を確保し権力の座に居た。表面上は皆が仕方無く服従

していたが、強引な政治手法には反発も多かったようである。道長の屋敷に盗賊が入り、天皇家の株券、高価な調度品などが盗まれた。

平将門の乱が終ったのは天慶三年（940）である。その頃は地方豪族の力が増す一方で中央政府の力が弱体化し、諸国には反乱の火種がくすぶり続けていた。将門の事件は平氏一族の領地争いが拡大したものと言われているが、日本一の大国である常陸の国府が焼かれたのである。藤原氏が朝廷を抱き込み、一部特権階層だけの専制政治を行っていたのであるから搾取、抑圧され続けた国民が違法な形でも抵抗することは必然である。

将門の事件から六、七十年経った時代が紫式部の登場する一条天皇の時代であるが、最高権力者の藤原道長さえ屋敷が盗賊の被害に遭う。それどころか一条天皇の治世には九年目に当たる正暦五年（994）には内裏が二度も放火され、さらに三条天皇時代には火災に遭った内裏から火事場泥棒が堂々と焼け残った貴重品を持ち去っている。如何に治安が悪かったかにも関わらず、上辺だけは華やかな摂関政治は続けられた。

長和元年（1012）二月十四日には天皇の交代に伴う後宮人事が発表された。まず彰子中宮は皇太后に据えられた。それまで皇太后であった藤原遵子（じゅんし）は太皇太后となった。この女性には道長の父の従兄弟の娘であり、円融帝の中宮であった。一条帝の生母（道長の姉・詮子）が生きていれば、まず間違い無くこちらが皇后から皇太后になるであろうが、既に他界していた。

そして今上帝である三条天皇の皇后は既に敦明親王を生んでいる城子が推されるべきであるが、道長が強引に自分の娘（妍子）を入内させ、かつ

これを皇后に推していた。困った天皇は二人とも中宮に納めて急場を凌いだ。城中宮に對し道長が嫌がらせをした記録が残されているらしい。

「中宮」とは、本来は皇后、皇太后などに関する事務を行う役所の名称なのだが、藤原氏が競争で娘を後宮に入れて権力の保持を図るようになる

と皇后候補が二人になることもあったので、苦し紛れに一人を皇后、一人を中宮としたのである。三条天皇は両方を公平に中宮に留めた。その中宮を立てる儀式などで内裏は慌しく、それに反して彰子皇太后の一条院は、年が明けたとは言っても後盾の天皇を失った寂しさは如何ともしがたく疎外されたような静けさの中に置かれていた。

「…式部、あなたはどお思いますか？私は皇太后になるのですよ…そのような年齢になったということですね…」

二十六歳になる彰子皇太后がポツリと言った。手持ち無沙汰だが騒いでも居られない女官や女房たちは、紫式部が書いた源氏物語の書写を手伝いながら時間を潰している。

式部は、聞こえないふりをして筆を走らせ続け、彰子の心中を推し図っていた。一条法皇の死から既に半年以上が経ち、ようやく失意の底から抜け出した彰子に「皇太后」は辛いであろう。

従姉妹の定子皇后が居た関係で一条帝の在位中は中宮のまま置かれた。そして三条帝の即位により、彰子中宮は皇后を経ずして皇太后となり、妹の妍子も同じ道を進む…皇太子の行方も絡んで言葉では言い尽くせない寂しさとも不安とも違う何かがかんかかっている。

それを理解出来ない訳ではないが、式部はわざと突き放すように言い切ることにした。彰子皇太后

后には天性の運がある…下手な慰めよりも自分の強い力であらゆる事態に立ち向かって貰いたい…敬愛する女性に式部は願っていた。

「…それは、妍子様ご立后含みのご都合でございますし…」 「？」

返事を忘れた頃になって、筆を擱(お)いた式部は彰子皇太后のほうに向き直って言った。

「皇后、皇太后はお歳に関わらず制度上のことでございますし…ここは割り切ってお考え遊ばしませ。皇后様より皇太后様の方が、お呼びするのに重みがあつて、今の中宮様にはピッタリのようにお見受けします…」

「…何やら現実から追いやられるようで…」

「何を仰せられます。お二人の親王様は皇位にお就きになられるのです。その時には幾らお若くても母君は皇太后さまですよ！」

「おお、そうであつた、そうであつた…式部、そなたと話す気分が晴れる…」

二人の親王の母であるこの女性は、嬉しいときには純真な少女のような表情をする…生まれながらの姫君だと式部は思った。一条皇后の定子や三条皇后となつた妍子が三代で世を去つたなかで彰子皇太后は自分の生んだ二人の親王が帝位に就き、その生母として八十三歳の長寿を保つ。

宮中で不幸があつた寛弘八年は紫式部にとつても波乱の年になつた。まず父親の為時が思いがけず越後の国司に任命されて雪国へ赴いた。都には三条天皇の秘書官だった同母弟の惟規と二人が残つたのだが、惟規は突然に官職を辞して父親の後を追ひ、越後へと去つたのである。

式部の肩に後宮の公務と共に、弟に去られた家族の面倒という重いつとめが押し掛かつてきた。

ギター文化館

2009 CONCERT SERIES

- 2月15日 鈴木大介 ギターリサイタル
- 3月15日 莊村清志 ギターリサイタル
- 4月18日 國松竜次 ギターリサイタル
- 5月5日 マヌエル・カーノ コレクションコンサート

ギター文化館

〒315-0124 茨城県石岡市柴間 431-35

0299 - 46 - 2457

Fax 0299 - 46 - 2628

編集事務局

〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)